

---

# 愛の言葉より、もっと、

青柳朔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛の言葉より、もっと、

### 【Zマーク】

Z8597C

### 【作者名】

青柳朔

### 【あらすじ】

一年前　十七歳という若さで女王となつたヴィアンカは、周囲を信用しなくなつた。婚約者であるエドワードも例外ではない。毎日毎日好きだというエドワードがどうしても信じられなかつた。ヴィアンカが欲しいのは言葉じやなくて、もっと。

ヴィアンカは自分の婚約者であるエドワードが嫌いだった。信用していないとも言つ。

いつもいつも微笑んで、好きだと囁く。信じられるわけがない。言葉が軽すぎる。

昔はそんな風に思うこともなかつた。ヴィアンカとエドワードが婚約したのはお互い小さな子供の頃で、初めて出会つた時の記憶がないくらいだ。幼い頃は兄妹のように仲が良かつたし、少なくとも二年前まではヴィアンカもエドワードを邪険に扱つたりしなかつた。

二年前、ヴィアンカは姫という甘やかされるだけ立場から、女王という人を治める立場になつた。健康だつた父があつさりと死んでしまつた。

ヴィアンカ以外に子供はいなかつたせいで、彼女は王になつた。そうして十七歳という若さで政治に関わつてくると、人間の汚い部分を否応なしに見てしまつた。

ヴィアンカの前では忠実な臣下を装つてゐる貴族の男も、影では女などとヴィアンカを貶してゐる。汚い言葉を使って彼女の悪口を零してゐる。

エドワードも変わつた。

今までは好きだなんて言つたことがなかつた。なのに、ヴィアンカが女王になつた途端に好きだと毎日のように囁くのだ。それがヴィアンカの不審を煽つた。

女王だから。

だから、ヴィアンカに嫌われないよう丁寧の言葉を惜しみなく囁く。ヴィアンカが女王でなければ、言つたりしない言葉も平氣で使う。

ヴィアンカはもつ、誰も信じよつとは思わなかつた。

「ビー」

女王であるヴィアンカを愛称で呼ぶ男など、この世で一人しかいない。

蜂蜜色にきらめく金髪に、夏の空のような青い瞳の好青年だ。今年で確か二十四歳になる。

「そう呼ぶのはやめてって何度も言えれば分かるのかしら。あなたの頭つてそれほどの理解力もないの？」

五歳も年下の少女に馬鹿にされているところの、嫌な顔一つせずエドワードは微笑んだ。

「今日も」機嫌ななめみたいだな。姫君は

「もう姫じゃないわ」

「俺にとつてはいつまでもお姫様だよ」

ほら、またそういうことを言つ。

ヴィアンカは眉を寄せて眉間に皺を作る。昔はこんなこと言わなかつたのに。

「あなたは暇なの？ 每日毎日城まで顔を出して。いつも地方に飛ばしてしまおうかしら。そしたらもうあなたに会わなくて済むわね」それは良い考え方かもしれないなんて本気で思ったヴィアンカに、エドワードは無駄だよと言い返す。

「そんなことしたつて来年からは嫌でも毎日顔を付き合わせる」とになるよ。忘れたわけじゃないだろ？

「……言つてみただけよ

忘れるわけがない。

一年後、ヴィアンカはエドワードと結婚する。それは婚約する時に決められたことだ。ヴィアンカが二十歳になつたら、何があつと それこそどちらかが死なない限り、結婚式は行われる。

「俺との婚約を白紙に戻す？ そんなことしたらあちこちの男からアプローチされて今以上に面倒になると想つけど？」  
そんなことも分かっている。

今更エドワードとの婚約を破棄して他の男から聞きたくもない口説き文句を聞くだけなら、このままエドワードと結婚したほうがましだ。

「 好きだよ、ジー」

エドワードはヴィアンカの黒髪を一房つまみ上げ、口付ける。  
その絵になる様を冷たい目で見つめながら、ヴィアンカはエドワードと距離を置いた。

「忙しいから」

そう言ひ捨てて、ヴィアンカはエドワードの下を去つた。

本気で好きになればきっと辛い。

相手は本当の愛情を返してくれないから。

昔ははしゃいでいた舞踏会も、今は億劫でしかなかった。  
綺麗なドレスも、心躍るようなワルツも、輝くシャンデリアも色褪せて見える。

綺麗な貴婦人と踊るエドワードを見つけた。舞踏会が始まつて一番最初に挨拶してきたが、周囲に怪しまれない程度に相手をしてそれからは無視した。

優雅な仕草でエドワードは貴婦人の手の甲に口付ける。そう、あの程度のことは誰にでもする」ことだ。

退屈。

ぼんやりと王座に腰掛けて眺めていると、だんだんとHドワードが近くなってくる。

「踊つていただけますか。女王陛下」

自分にやう話しかけられているのが自分なのだと、気づくのが遅くなつた。

につこつと微笑むエドワードは、間違いなくヴィアンカを見つめていた。

「……ダンスは苦手な

「知つてますよ。俺を誰だと思つてるんですか」

そう言つて半ば強引にヴィアンカを連れ出す。しかもダンスというのは口実で、Hドワードはヴィアンカの手を取り、そのまま会場を抜け出した。舞踏会は時間が経つほど賑やかで、女王がいなくなつたということに気づく者も少なく、共に消えた相手が婚約者だといつことで気にかけない者も多かつた。

「ちょっと……どこに行くのー？」

「一人きりになれるところに。このあたりでいいか」

会場から流れる音楽は、ここでも聞こえた。先ほどとは変わって気安く「踊る？」と問い合わせてきたエドワードを睨みながら、ヴィアンカは首を横に振つた。

「誰もいないところで、聞きたかったんだ。……ビー。俺のこと嫌い？」

ヴィアンカは驚いた。まさか直球で聞かれるとは思わなかつたからだ。

「嫌いよ」

「どうして？ 昔は嫌つてなんかなかつた。……一年前までは。女王になつて何があつた？」

何も、と言つて顔を逸らそうとしたが、出来なかつた。

「…………… HDワードがとても真剣な顔をしていたから 」。

「…………… 変わったのはあなたじゃない。いつもいつも好きだ好き  
だって 菲はそんなこと言わなかつたわ。頼んでも書つてくれな  
かつた」

「だから信じられない？」

ヴィアンカは何も言えない。

怖かつた HDワードが、本氣で怒つていていたから。  
いつも優しく微笑んでいただけのエドワードが。

「どうすればいい？ どうすれば信じてくれる？ HDとなつて、孤  
独なビーを支えよう」と、そう思つてきたのに

「 何を、」

言つてゐる、と問おうとしたヴィアンカは息を呑んだ。  
握つてHDワードの腕がヴィアンカの小さな身体をいとも簡単に  
包み込んでしまつ。わづわづへ抱きしめられて、呼吸が出来ない。  
胸が苦しい。

「 愛してゐ、愛してゐ、愛してゐ 何度言えばいい？ 何度言え  
ば、信じてくれる？」

耳に熱い息がかかる。

激しく鳴り響く心臓の音は自分が それともHDワードのもの  
だらうか。

「離して、HDワード。離して」

「離れない」

即答された。

HDワードが話すたびに、ヴィアンカの耳に吐息がかかる。くら  
くらと眩暈がしそうだ。

「いつまでも優しい紳士でござると思つた。甘こよ、ビー

「そんなこと、思つてない」

ヴィアンカは答えながら、息を吐く。今までこんなに強く抱きし

められたことはない。優しい抱擁は小さな頃から何度もしてきたけど。「ルセットよりも苦しいことなんてあつたのか、なんて、ヴィアンカは思つ。

苦しいのは抱きしめられているから?

いや、たぶん違う。

「どんな言葉ならいい? 愛してるじゃ伝わらない?」

ヴィアンカはびく、と身体を震わせた。

熱い吐息が耳元を、首筋をくすぐる。早くこの腕の中から解放されたい。そうでなければ、きっと今にも心臓が悲鳴を上げて、ヴィアンカの命を奪つてしまいそうだ。

ああ、捕らわれてしまった。

もう逃げられない。

傷つくるのが怖いから、自分が愛しているのに愛されないのは辛いから、だから嫌いになつとしたのに。

「……言葉じゃ信じられないわ。言葉じゃなくて、もつと

ヴィアンカの言葉は遮られた。言葉を紡ぐはずだったヴィアンカの口は、エドワードのそれで塞がれる。髪の毛にするキスでも、手の甲にするキスでもない。

「愛してるよ、ヴィアンカ」

キスのあとにさう囁かれるのは悪くないなんて、思つてしまつた。

しかし、ヴィアンカは自分で言つたことを後で死ぬほど後悔した。まさか今まで毎日好きだと言つてきた代わりに、毎日キスされる

破目になるなんて、想像もしていなかつたのだから。

## （後書き）

「ラブライブの話を書いてみたいと思って書いたのがこれです。結局ラブライブなのはこの話が終わつた後ですが。

ヴィアンカもエドワードも愛称で呼ばせたくて名前をつけたのに、エドワードは結局意味なかつたです（苦笑）

感想、指摘等あつましたら一言でもかまいませんので、書いてくださいると作者が喜びます。

読んでくださいありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8597c/>

---

愛の言葉より、もっと、

2010年10月8日14時34分発行